

## 生物統計学と自分との距離

佐藤 俊太朗 (長崎大学病院臨床研究センター)

統計学をはじめて知ったのは高専 2 年生のときでした。『ジョジョの奇妙な冒険』が好きな先生で、講義の時もジョジョ、ジョジョ言っていてわけわからなく、試験の点数も悪かったことを記憶しています。次に統計学と接点をもったのは編入学先の長崎大学で当時教鞭をとっていた中村剛先生の演習でした。2006 年、まだ R に関する書籍は『The R Tips』(舟尾暢男著, オーム社)があるぐらいの時代です。C 言語やアセンブリ言語を学んだことがある私は、R のコーディングの簡便さに驚き、R コードが書けることを「R が得意→統計学が得意」と勘違いし、そのまま統計学の世界に入門しました。統計学、特に生物統計学(ここでは医学分野における生物統計学の意)に入門したことは後悔していませんが、難しいことだらけです。

私は、修士課程修了後、4 年ほど東京の開発業務受諾機関(CRO)でデータマネジメントや統計解析業務をおこない、2014 年から長崎大学病院臨床研究センターの生物統計家として働いております。具体的な仕事は、医学研究者からの統計相談、臨床研究センターで支援している臨床試験の研究デザイン策定・統計解析、共同研究者としての統計解析、学内外向けの講義・セミナーです。特に統計相談と講義・セミナーは、医学研究者の悩んでいること、解決したいことを読み取り、できるだけわかりやすく伝えることが必要で、やりがいもあり、楽しい仕事です。

ここまで読むと生物統計学と楽しく付き合っていそうですが、私には「生物統計学に関する学術的な研究ができていない」という悩みがありました。仕事をしながら通った久留米大学で生物統計学の研究に向き合った期間もありましたが、生物統計学の最先端を牽引していく研究や研究者に強い憧れがずっとありました。生物統計家を名乗っているのに研究ができていない自分に少し後ろめたさも感じていました。

この悩みに 2 年間ほど向き合い、自分の生物統計家としての立ち位置を徐々に定めています。今は生物統計学の最先端を牽引するのではなく、押し上げる、裾野を広げることに貢献したいと考えています。医学研究の現場に目を向けると、研究をやりたいという熱意があり、かつ臨床疑問は良いのにもかかわらず、研究デザインが練り上げられてなかったり、統計解析方法が妥当ではなかったり、解析できなかったりする研究者が多くいます。しかも多くの場合、高度な考え方は必要ありません。非常にもったいないです。これらの研究者に対し個人単位では統計相談、集団単位では講義・セミナー、あるいは書籍を通じてサポートすることができれば、もったいない結果も減りますし、大げさに言うと日本の研究の質は向上するはずです。最先端の統計手法をユーザーまで届ける橋渡しもできるかもしれません。また、統計相談や共同研究をきっかけとすることが多いのですが、ありふれた手法を使っているのにもかかわらず局所的に統計的な性質がわからず、その手法を使って良いのか悩んだり、ある分野においてよく使われている指標がわかりづらい、といった場面にもそれなりの頻度で遭遇します。学術的には一塁にやっと間に合うようなヒットかもしれませんが、研究にもなりますし、統計ユーザーにとっては役に立つと思います。

公衆衛生では、個人に対しては非常に小さな効果でも、その効果の標的集団が大きければ結果的に効果の総量は大きくなるという考え方があります。この考えを胸に行動し、生物統計学分野に微力ながら貢献していきたいと思っています。